

# Deferrari のロマンス諸語通時音声学について

Sobre 'La fonética diacrónica de las lenguas románicas' de Deferrari

原 誠  
Makoto HARA

## 0. はじめに

本稿は1989年5月27日(土)文化女子大学において開催された第26回日本ロマンス語学会大会において筆者が同名のタイトルでおこなった講演をのちに文章化したものである。1950年に Deferrari が50歳で死去した時、彼の遺品の中に、Deferrari, 1954の原稿があり、しかも生前著者はどこかの出版社で出版してもらおうべく足を棒にした形跡もあったので、哀れに思った彼の二人の姉妹と三人の兄弟が Harry の原稿を出版したのである。日本では本書を蔵書としては持っていない、論文の中でこれに言及する人は少ないというよりも、いないような状態であり、しかもそのような無視に値する著作ならそれでもよかるうが、筆者にはむしる端倪すべからざるものに見えるので、ここにその内容の一部を紹介し、筆者の立場からの批判を加えることにした。筆者はつねづねロマンス語学のあまりの困難さに絶望している者であるから、ロマンス語学への貢献もこのような形でしか、すなわちある書物を読んでその内容の紹介および批判しかできないことをこの上なく恥かしく思う。

## 1. 「まえがき」 p. vii.

この部分で注目に値するのは、

“最大効果と最小努力の二つの原則は意味論のみならず言語学の他のあらゆる分野にもあてはまるというのが我々の信念である。”

と述べている部分である。この「最小努力」ということばは以下再三再四出てくることになる。

## 2. 「まえがき」 p. ix.

“言語学における「音素論的」アプローチは「細部の(非音素論的)」変異の有する価値に関して学生の判断を誤らせることに大いに貢献した。”

この文言から我々が読み取れることというのは、当時アメリカで華やかに流行していたであろうアメリカ構造主義言語学の音素論もまだこれを通時的に適用しようとはしていなかったらしいということである。たしかに Deferrari の言うとおり、通時音韻論では音声の実質を尊重せねばならない。(この点については原, 1982の pp. 59-60 を参照されたい) しかしだからと言って音素論を無視してもよいということには決してならない。

## 3. 「まえがき」, p. x.

このページには次のような問題多き文章がある。

“ロマンス語学について我々はよく総体的な叙述をすることがある。しかしながら我々の結論はほとんどつねにわずかに三つの言語——イタリア語, スペイン語, フランス語のデータにのみ基づいていることが多い。従

って便宜上我々は「イタリア語とスペイン語とフランス語」と繰返す代わりに「ロマンス語」という語を用いることにする。”

冗談ではない、例えばサルジニヤ語は東西ロマニヤのいずれにも属さない、ロマンス語学上非常に重要な地位を占める言語である。

4. 「まえがき」, p. x.

“多くの音変化は究極のところ音響学的同一化 (=均一化=同化=エネルギーの保存) に基づいて「説明」されよう。”

ここで述べられている「エネルギーの保存」とは1. で出てきた「最小努力」と同義である。なるほど多くの音変化は最小努力の法則、すなわち経済性の原則、すなわち生理学的要因によって説明されるが、それだけでは絶対に無理である。構造的要因や歴史・社会的要因もそれに加えた方がよい。たまたもし言語音に最小努力の法則ばかりが働いたら、どうなるかということも考慮すべきである。つまり真に努力を最小にしようと思ったら、音を発しないのが最上である。それでは困るというので、そこは実に良くしたもので、それまでの弛緩の傾向とは逆の、緊張の傾向が働くのである。Deferrari にはこういったことへの配慮が皆無である。この点に関しては原、1980の pp. 26-27 を参照のこと。

5. 「まえがき」, p. x.

“「音素」の理論は言語学の進歩を阻害するのに著しく貢献したというのが我々の信念である。”

どうも Deferrari という人には音素に対する偏見があるようである。だからこそ通時音韻論における構造的要因を認めないのであろう。

6. 「まえがき」, p. xi.

“「一般則」という言葉が繰返し出てくるが、この語も学生の心に重要事項を印象づけるための手段として熟慮の上用いられているのである。”

この文章でも分かりますとおり、Deferrari は本書を教科書として用いることを意図していたようである。そして教科書として有用であるためには「一般則」という形で音変化のルールを概括するのだが、当然のことながらそこから漏れる例外的事項がたくさん出ることになる。

7. 参考書目, pp. 6-7.

ここには Bloomfield, Grammont, Jespersen (「言語」), Meillet, Sapir, Saussure, Twaddell といった錚々たる言語学者の顔触れが並んでいる。Deferrari は音素および音素論嫌いなのに、アメリカ構造主義言語学の音素論の創始者とも言える Sapir と Bloomfield の名前が挙がっているのは興味深い。

8. ロマンス語の一般則。音全般について。p. 26.

このページからロマンス語の一般則の列举が始まるのだが、その構成はまず「音全般について」、次に「母音全般について」、そして最後に「子音全般について」となっている。

9. ロマンズ語の一般則 2, p. 26.

“本書では（實際的目的のため）、言語変化の基本的原因は単純化への傾向（エネルギーの保存）であると我々は想定する。”

似たようなことは 1. でも述べられていた。なかなか大胆な主張であるが、このような単純極まる一元論的説明では、複雑なことこの上ないもろもろの言語現象を正確に捉えることはできない。やはりこの他に構造的要因や歴史・社会的要因も加えねばならない。しかもできるだけ多くの説明を用意した方がよいのである。（この点については原、1970の p. 1 および原、1987 a を参照されたい）。

10. ロマンズ語の一般則 9, p. 28.

“ロマンズ諸語にあっては、部分的同化あるいは完全同化は、当該音どうしがすでにある程度似通っている時にもっとも頻繁に起こり易い。”

同化というのは音どうしが異質だからこそ起こるのである。たとえばルーマニヤ語の LACTE <lapte ではあとの t に引かれて k が p になっている。またスペイン語でも LACTE > \*laçte > leche とか、REGULA > \*reila > reja におけるように、後続の t に引かれて k が ç になったり、g が i になったりしている。Deferrari の誤りである。

11. 母音全般について、ロマンズ語の一般則 14, p. 28.

“俗ラテン語がさまざまなロマンズ諸語に分化していくにつれて、極端に位置する母音 i, u, a には変化に抵抗する傾向が起った。”

これもまた虚偽である。スペイン語の語末の -i, -u はそれぞれ -e, -o に開いている。例：FECI > hice, FORMOSU > hermoso. フランス語の  $\acute{U}$  も y に変わっている。LUNA > lune. 同じくフランス語では  $\acute{A}$  さえも e または e に変わっている。例：SALE > sel, AMATU > aimé.

12. ロマンズ語の一般則 22, p. 29.

“俗ラテン語の母音がロマンズ諸語において二重母音化する時、それら二重母音化の最初の比較的安定した結果は次のとおりである。

（中略）

強勢はもとの母音の上に残る。”

これについても定説にはなっていないけれども、Alarcos, 1965 の pp. 221-225 に、原初は  $\acute{ie}$ ,  $\acute{úe}$  だったのではないかという大胆な説が展開されていて、Menéndez Pidal, 1956 の pp. 121-139 で展開されている、原初から  $\acute{ie}$ ,  $\acute{úe}$  であったという説に対する重大な反論を形成している。

13. ロマンズ語の一般則 24, p. 30.

“ロマンズ諸語の変化過程において、二重母音の単母音化（合一）はおそらくエネルギーの保存（同化）の必要によるものであり、二重母音化（母音の分割）はおそらくは明晰性への必要（異化）によるものである。”

これも大いに問題がある。もっぱら単母音の二重母音化の方に論点を絞ると、たとえば俗ラテン語の  $\acute{e}$ ,  $\acute{o}$  が

スペイン語でそれぞれ ie, ue に二重母音化した現象をここでは取り上げてみよう。原, 1968の pp. 28-29 や原, 1987 a の pp. 16-17 ではこの二重母音化に対して構造主義的説明がなされている。つまり i, u, e, o, a の5母音体系があらゆる言語の母音体系のうちでもっとも理想的であり, また e と ε, o と ɔ の間は比較的短いので混同が起き易いから, 7母音体系の ε と ɔ を二重母音化することによって5母音体系にしたというのである。その意味ではたしかにこれによって明晰性が獲得されている。しかし原, 1987 a の pp. 15-16 に紹介されている Alarcos, 1965 (pp. 218-226) の歴史・社会的説明, すなわちバスク語基層説がもし正しいとするならば, このような歴史・社会的説明はエネルギー保存の必要とも明晰性への必要とも無関係である。さらに生理学的要因を筆者は原, 1987 a の pp. 17-18 ではこの現象に適用できないとしたが, その後自説を改変して, 原, 1987 b の pp. 7-8 においてこの二重母音化を laxing と解釈した。もしこの説が正しいとすると, 異化は本質的に tensing であるから, Deferrari の一般則24への反証を形成してしまうことになる。これを要するに音変化の原因を同化と異化だけで説明しようとするのが無理だということになる。

14. ロマンズ語の一般則 28, pp. 30-31.

“非常に一般的な言い方をすれば, 人は無強勢の位置における母音は弱まったり, ゼロになったりする傾向があると言うことができよう。”

非常に一般的な言い方でも, このようなことは言えないと筆者は思う。筆者は原, 1985の p. 28 において,

“筆者はかねがね10種類のロマンス諸語のうち, 無強勢音節の母音を曖昧化しないのはスペイン語とイタリア語とサルジニャ語だけであると主張している。その他の七つのロマンス諸語は多かれ少なかれ無強勢音節の母音を曖昧化している。”

と述べた。前者にプロヴァンス語を加えなかったのは筆者のミスである。このプロヴァンス語についてのミスはともかくとして, もし筆者の上掲の考えが正しいとすれば, 逆に Deferrari の一般則は大きな見落しをしていることになる。

15. 子音全般について。ロマンス語の一般則 35, p. 31.

“あるロマンス語において流音 l と r の変化の仕方と (周囲の音への) 影響の仕方はしばしば同様である。”

とんでもない話である。スペイン語では l は口蓋化し易く, r は口蓋化しにくい。例: MULIERE > \*mu<sup>h</sup>ler > mujer; CORIU > \*coiro > cuero. なおこれについては24. 「スペイン語97」を参照のこと。

16. ロマンズ語の一般則 36, p. 31.

“ロマンス語史において r は変化に強く抵抗した。”

この言はある程度正しい。しかしカタルーニャ語の不定詞の末尾の -r は発音されないし, スペイン語でもアンダルシア方言には,

señá (= señora)

quieá (= quiera)

misiá (= mi señora)

のような例がある。つまり r はゼロになることもあるのである。

17. ロマンズ語の一般則 39, p. 32.

“語頭子音および／または音節初めの子音は一般に強い位置にあり、不変化のままであったり、強まったりする傾向がある。”

これについてもスペイン語ですぐに反証を挙げることができる。たとえば F->h->ϕ がその最たるものである。また Martinet, 1955 の p. 282 によれば、スペイン語で LUNA>luna となっているが、語頭は強い位置なので、L- は本来なら f- と口蓋化せねばならないはずである。それが l- のままで留まっているということはむしろ弱化であることを物語っているのである。

18. ロマンズ語の一般則 44, p. 32.

“一般的に言って、母音間の子音は弱い位置にあり、従って弱化的傾向にあるということができよう。この母音間子音の弱さはとくにフランス語とスペイン語の音変化において顕著である。”

これはたしかにそのとおりである。しかしスペイン語で例外が見当たらないわけではない。すなわちそれは p. 257 に出ている「スペイン語の一般則 6」に該当する、母音間有声歯擦音の無声化である。すなわち中世末期から近世にかけてカスティーヤ語では、

z>s  
dz>ts  
z̃>š

という実に珍しい変化が起こったのである。

19. ロマンズ語の一般則 50, p. 33.

“一般的に言って、俗ラテン語の語頭子音群は不変化のままである傾向が強いと言えるだろう。”

「一般的に言って」と書いてあるから、めくじら立てて例外を捜し求めるのも大人気ない話であるが、これにもスペイン語で例外はすぐ見つかる。すなわち PL-, CL-, FL->f- がそれである。例：PLUVIA>lluvia, CLAMARE>llamar, FLAMMA>llama。これについては Catalán, 1962 の反構造主義的コメントがあり、これに Alarcos, 1965 がその p. 251 で反論を加えている。

20. 序145「言語変化理論のあらすじ」, p. 79.

“これ(Deferrari の理論)はほとんどもっぱらイタリア語とスペイン語とフランス語の歴史音声学のデータに基づいている。しかしながらおそらくは他のロマンス諸語に、そして多分すべての言語にあてはまるであろう。”

(中略)

簡単に言えば、我々の理論は次のようである。すなわち言語はすべて言語社会の安寧のために必要なだけ明瞭で力強くあろうと努力するし、また努力をできる限り少なくしながらそうあろうと努めるのである。

(中略。以下 p. 80)

言語変化は同化と同化への反作用とによって惹き起こされる。

(中略。以下 p. 83)

もちろん我々の理論をより美しく見せるために言語データを枉げることを決してしないことが本書を著すに

当っての我々の不変の方針であった。にも拘らず、我々のこの理論と我々の生理音声学の知識とを慎重に適用しさえすれば、音変化における中間的段階の性質と時期とを相当正確に言い当てることができるように思われる。

例：俗ラテン語的フランス語 *kanę*, 古典ラテン語 *cānem* > 第1期古フランス語 *tšjén chien* > 初期第2期古フランス語 *tšjén chien* > 後期第2期古フランス語 *šjē(n) chien* > 現代フランス語 *šjē chien*

(中略。以下 p. 91)

以上を要約すると、すべての言語変化の基本的原因は、実効(明晰性)を求める力と、エネルギーの保存を求める力という、二つの力(ほとんどまったく無意識の)の争いであると言うことができる。”

「イタリア語、スペイン語、フランス語の歴史音声学のデータはおそらくは他のロマンス諸語に、そして多分すべての言語にあてはまるだろう」というのはあまりにも楽観的に過ぎると思う。後に見るように、スペイン語がイタリア語やフランス語の歴史音声学のデータとは違っている場合ですら数多いのである。「言語は明瞭性を最小努力の法則に従って追求するという主張はすでに 13. に現れている。しかしそれだけでは済まないことはすでに 13. でも述べている。

「言語変化は同化と同化への反作用とによって惹き起こされる」という主張は上の主張と同じであり、恐るべき単純化である。

次に p. 83 に載っている古典ラテン語から現代フランス語までの「犬」を意味する単語の音的変遷は、著者自身も「相当正確に」と述べているように、実に克明を極めていて、その恐るべき勇敢さにただただ感嘆するばかりである。思うに、これが教科書であることを考慮して著者は音変化の年代について少し割り切り過ぎをしたのではなかろうか。ちなみに、「第1期古フランス語」とは7世紀初めから11世紀末までのフランス語のこと、「初期第2期古フランス語」とは12, 13世紀のフランス語のこと、「第2期古フランス語」とは12世紀初めから15世紀末までのフランス語のこと、「後期第2期古フランス語」とは14, 15世紀のフランス語のことだそうである。こんなに画然と時代区分が可能なものであろうか。

p. 91 では再び「明瞭性と最小努力の法則とのせめぎ合い」説が顔を出している。Deferrari の執念のようなものを感じざるをえない。

p. 235 からは「第Ⅱ部：スペイン語の歴史音声学」が始まる。そして p. 261 からは「強勢母音」が扱われる。

## 21. スペイン語 84, p. 265.

ここでは  $\varepsilon > ie$  が扱われていて、Deferrari はなんと「初めから *ié* であったことはたしかだ。なぜならフランス語でもイタリア語でもそうであったから」と言っているが、これは暴言である。12. で紹介した Alarcos, 1965 の説は、Menéndez Pidal, 1956 の説に対する重大な反論を形成しており、両説の勝敗は未だについていない。

Menéndez Pidal の説は、ローマ人のもたらした  $\varepsilon$  をイベリヤ半島の原住民が発音できず、従って *eé* という二重母音で発声しているうちに両母音ともそれぞれ一段階開口度を落として *ié* となったという、言わば単純な説である。もちろん  $\text{co} > \text{oó} > \text{wó} > \text{wé}$  についても同様の説明がなされる。

これに対して Alarcos は原初 *íe*, *úe* だったと主張する。その論拠は、1) 二重母音はそれを大きさに発音することから発生する。2) 二重母音化は最初話し手にも書き手にも気づかれぬものである。3) アストゥリヤ

ス方言には二重母音の第1の要素に強勢のある例も多数認められる。このような二重母音の揺れが原因なのであろう、方言学者の記録には *timpo*, *cilo*, *pusto*, *puđet* 等の不完全な緩りが認められる。4) [iə] が原初の状態だったろう。それが証拠に、-iello が -illo に縮まっている (10世紀)。5) *oi*, *uo*, *óe* 等の別の二重母音が *ue* に同化されている。これらは原初 *úe* でなければ説明できない。 というものである。フランス語、イタリア語もそうだからスペイン語もそうだというのはとんでもない話である。

22. スペイン語 93, p. 268.

ここでは Deferrari は、

俗ラテン語 *agoriu*, 古典ラテン語 *augurium* > 現代スペイン語 *aywefo agüero*

という変遷を考えている。なお各文字の下または上に横線が引かれている場合があるが、これはその文字の音声の実体が昔のことゆえよく分からないことを意味している。しかも彼はここでもまた第2期フランス語に [ó] という音形があり、後期第2期古フランス語ではこれが [wé] に変わっていることから推量して、スペイン語でもこの変化過程を経たのだらうとしているが、21. で Alarcos の Menéndez Pidal の説への反論を紹介した際に、筆者が提示した Alarcos による反論の論拠の5) では *oi* は *ue* に類推されたとされている。とにかくフランス語の事実をすべてスペイン語に適用してしまうのだから始末が悪い。

23. スペイン語 94, p. 268.

Deferrari がここで出している変化式は、

俗ラテン語 [ó] > 初期古スペイン語 [wó] > 後期古スペイン語 [wé] > 近代スペイン語 [wé] > 現代スペイン語 [wé]

というものである。しかしこの節の末尾 (p. 269) では、

“従って変化過程は [wó], [wóe], [ué] だろう。”

と言っている。

ところがこれはスペインで行われているスペイン語史の常識からは大きく外れている。たとえば Menéndez Pidal, 1956 の p. 126 では、

“*wo*, *we*, *wö* はレオン、ポルトガル、イタリアの方言において共存しており、*we*, *wö* はカスティーヤ方言において共存している。”

と書かれている。また Alarcos, 1965 の p. 223 でも、

“[pwórta], [pwörta], [pwérta], [púorta], [[púórta], [púerta] 等は共存している変異形どうしである。”

と書かれている。要するに、このように変異形どうしが共存していて、その中から一つだけが勝ち残ったというか、代表的なものとなったのである。

24. スペイン語 97, p. 269.

“しかしながら僅かの場合において、俗ラテン語の強勢母音 [ɔ] はあとに [i] が来ても [wéi] と古スペイン語(7世紀初めから16世紀末まで)で二重母音化したあと、[i] を吸収してしまい、近代スペイン語では [wé] となった。”

と Deferrari は述べたあと、

俗ラテン語 *korju*, 古典ラテン語 *corium* > 古スペイン語 *kwérjo* > 古スペイン語 *kwéjro* > 近代スペイン語 *kwérq* > 現代スペイン語 *kwefo cuero*

という変化過程を呈示している。

しかし筆者が 21., 22. で紹介したように, Alarcos は *oi* の *ue* への類推と捉えており, 筆者はこの方が正しいと思う。しかも *agüero* と *cuero* とで変化過程が違うことになってしまい, 筆者にはまったく納得がいかない。

## 25. スペイン語 149, p. 287.

このページからスペイン語の子音が扱われている。まず語頭子音から。p-, b- を簡単に扱ったあとは f- である。

俗ラテン語的スペイン語  $\Phi a\beta(u)lare$ , 古典ラテン語 *fabulare* > 初期古スペイン語  $\Phi a\beta l\acute{a}r$  *fablar* > 後期古スペイン語  $\mathcal{c}a\beta l\acute{a}r$ ,  $\acute{y}a\beta l\acute{a}r$ ,  $\bar{w}a\beta l\acute{a}r$  *hablar* > 古スペイン語 (16世紀)  $a\beta l\acute{a}r$  *hablar* > 現代スペイン語  $a\beta l\acute{a}r$  *hablar*

という, ラテン語の語頭の f- が  $\phi$  になるまでの変化過程についての珍説が披露されていて, しかもそのあとに,

“古スペイン語の h の起源と変化について学者によって多くの説明が提案されたが, どれ一つとして完全に納得のいくものはない。”

とダメが押されている。筆者の知る限り, F- から  $\phi$  に至るまでの変化過程の間に, 口蓋化した h だとか, 無声化した w だとかを想定する説は初めてである。口蓋化した h, つまり  $\mathcal{c}$  を想定するとなると, これはゼロにはならないのではないかと思うのだが, どんなものだろう。われわれのスペイン語史の常識からすると, F->h-> $\phi$  は動かず, ただ F- と h- との間に, [ph] とか [ø] を想定する Martinet, 1955 の p. 307 に出ている説があるだけである。ちなみに筆者は原, 1987 a の pp. 13-14 においてこの F->h-> $\phi$  につき, 構造的要因と生理学的要因と歴史・社会的要因のすべてを認めている。なおこの生理学的要因については, スペイン語には俗ラテン語の時代以降語頭を強め, 語内を弱める傾向があり, この傾向に F->h-> $\phi$  は反するという指摘が清水, 1988 でなされた。ということはこの場合は歴史・社会的要因が, 語頭を強める傾向を抑えてしまうほど強力であることを物語っている。従って筆者は, かつてしたように構造的要因をつねに最優先し, その次に生理学的要因を置き, 最後に歴史・社会的要因を用意する方針をそろそろ撤回し, ケース・バイ・ケースで順位を決めようと考えているところである。

## 26. スペイン語 151, p. 289.

“俗ラテン語的スペイン語 語頭の [β] (古典ラテン語 [w]; v または u と書く) > 古スペイン語 [β] > 近代スペイン語 (17世紀初頭以降) [β] > 現代スペイン語 [b].

俗ラテン語の [β] は後期一般俗ラテン語では [v] となるのが普通だが, 後期俗ラテン語的スペイン語ですらこの音は [β] のままであったことを示す証拠がある。”

筆者は寡聞にして古スペイン語で u- または v- が [β-] と発音されていたという証拠を知らないが, この件については Alonso, 1962 の書評を行なっている原, 1970 の p. 7, において,



“DA (= Dámaso Alonso) は推定によって15世紀前半または14世紀前半までは遡ることが可能であろうとしている。”

という Alonso の言だけは紹介しておいた。現在の筆者は、Deferrari と同じく、当初からスペイン語には [v] はなく、[β] のままであったろうという仮説を支持しており、その意味でこの Deferrari の言は筆者にとっては大変心強いものなのである。

## 27. スペイン語 157, p. 290.

“俗ラテン語 *sapone*, 古典ラテン語 *sāpōnem* > 古スペイン語 *saβón xabón* > 近代スペイン語 *xaβón jabón* > 現代スペイン語 *x<sup>1</sup>aβón jabón* (*x<sup>1</sup>* は口蓋化していない軟口蓋・摩擦音を表す)。

ラテン語の [s] はある程度まで硬口蓋音である。しかしながらわれわれは、なぜある語では語頭の [s] が [š] になり、他の語では [š] にならなかったのか分からない。

古スペイン語の [š] が近代スペイン語の [x] になぜなったかは説明がむずかしい。

少なくとも部分的な説明なら「勢い理論」によってなされることを注記しておくのも一興である。かくして、[s] から [š] への変化は口の後方への動きを意味しているから、[š] から [x] への変化は同じ後方への動きの継続の結果なのである。”

ラテン語の [s] が舌先歯茎音だったことは Galmés, 1962 によって証明済みである。次に Alarcos, 1965 の p. 266 を見ると、*simio* ~ *ximio*, *sastre* ~ *xastre* 等の混同の例が出ている。舌先歯茎音の [s] と硬口蓋音の [š] とは音声学的に酷似しているので、往々にして両者の混同が起こるのである。従ってつねに混同が起こるわけでも、決して混同が起こらないわけでもない。

[š] が [x] になったのは、舌先歯茎音の [s] と [š] とを、混同が起きないように引離す必要があり、そのためには無声・軟口蓋・摩擦音の占めるべき位置があきまとなっていたので、そのあきまを埋める力が働いたという、非常に構造主義的な説明が威力を発揮する。Deferrari はもっぱら生理学的説明 (= 最大努力の法則) にばかり頼るから、この軟口蓋音化現象を説明しにくいのである。この構造主義的説明はあの構造主義嫌いの Dámaso Alonso でさえ認めているくらいであるから、相当に説得力が強いと思われる。「勢い理論」などという怪しげな説明を持ち出す必要はまったくなくなってしまうのである。

Deferrari は p. 294 の「スペイン語166」の最後の部分で、

“ [š] から [x] への変化は [š] の調音点の後退の結果であり、この後退は後続の後方母音によって始められたものである。”

と述べ、*judex* > *juéz*, *jocu* > *juego*, *jurat* > *jura*, *jurare* > *jurar* 等の例を挙げているが、なぜこの説明を「スペイン語157」でできなかったのか不思議でならない。この説明は筆者としても全面的に否定し去るわけにはいかないのだから。

## 28. スペイン語 158, p. 291.

本節では CENTU > *ciento* のような *velar softening* の例が取り上げられている。しかもこれについてはまず TY, それに続いて KY がととなり、引き続いて KE, KI が口蓋化を起こしたので、それまでのとがさらに前進して ć となったという、いわゆる「勢い理論」、筆者の用語で言えば、「メジロ押し」による説明が効果的に用いられている。たしかに Deferrari 言うところの「勢い理論」はここでは威力を発揮している。Martinet,

1955 はその p. 61 において、

kui → kwi → ki → ċi

というふうに図示している。しかしこれについては「勢い理論」による説明だけでは不足なのであって、Alarcos, 1965 の p. 237 に書かれているように、まったくの無人の境であったラテン語の硬口蓋音序列を埋めている傾向の一端と構造主義的に捉えることが必要である。しかし残念ながら、Deferrari にはこのような発想はない。

29. スペイン語 182, p. 298.

本節では、古スペイン語における agüelo と abuelo との交代について、いかなる納得のいく説明もなされたことがないと Deferrari は述べている。しかしその直後において、

“[β] はその唇音的性質によって摩擦子音として特徴づけられ同定されるが、他方では [w] の舌の位置をも保っていたのである。”

と正しい説明をしている。どうもよく分からない。筆者の言葉でこれを表現するならば、正統的な abuelo を発音すると、βのあとにwが来ているために、円唇化が起こることはもちろんだが、付随的に軟口蓋でも摩擦が起こる。ところが軟口蓋での摩擦が主役になって、両唇摩擦と円唇化とが付随的になったのが、agüelo なのであるとなろう。

30. スペイン語 190, p. 299.

ここでは CRUDU > crudo, NIDU > nido のように母音間の有声破裂子音が摩擦音化した時点で変化が止まる場合がとり上げられている。もちろん SEDERE > ser のように -D- > -ð- > ∅ のケースも考えられる。そしてこれは両唇音や軟口蓋音についても平行している。Deferrari は、このように β, ð, ɾ で止まる場合とこれらがゼロになってしまう場合とがあるが、これについての納得のいく説明は未だかつてあったためしがないと言っているが、これはまさにその通り、どうにも規則化ができないのである。ただし β, ð, ɾ で止まる場合は、過剰単純化 (=ゼロになること) への抵抗ではないかとも言っている (p. 26, 「ロマンス語一般則 2」) が、そうだとするとこんどはゼロになる場合が説明できなくなる。

31. スペイン語 249, p. 311.

PL-, CL-, FL- > ʎ

上記の現象について Deferrari は「この強い l が先行子音を消滅させ、それらの同化を惹き起こした」と述べているが、どうやらこの説明は正しいようである。Zamora, 1970 の p. 243 を見ると、Ribagorza のアラゴン方言においては、plaza が pillasa, pluma が pilluma, plato が pllato となると書かれている。これが何よりの証拠である。

32. スペイン語 332, p. 335.

“俗ラテン語 aliu, 古典ラテン語 alium > 後期俗ラテン語的スペイン語 aʎu > 初期古スペイン語 aʎo > 古スペイン語 aʒo > 近代スペイン語 axo ajo > 現代スペイン語 axo ajo.

次に、[ʎ] はおそらく口蓋音の強い影響力と最終的支配力の結果として [j] になったのだらう。

母音間でなぜ強めが起こったのかは説明しにくいけれども、この [j] が [ʎ] になったのは明らかに強めの結

果である。しかしながら、[j] は母音間にあるのだから弱化の傾向にあった、それが実際には強めが起こったのはこの弱化の傾向への反撥のためであると想定するのが合理的のようだ。”

この問題は解決が大変難しい。まず Alarcos, 1965 は、その p. 262 においてこの難問をとり上げ、もし LY, K'L に由来する /ʎ/ が [j] を経て [ʒ] になったのであれば、DY に由来する [j] も当然 [ʒ] になっていたはずだと言う。このジレンマを解決するために、彼は [ʎ] と [ʒ] の間に [\*ddʒ] という二重子音を想定する。これに対し、Hara, 1988 はその時代にはすでに二重子音化の傾向は消え去っていたから [ʎ] は直接 [ʒ] に移行したと推定している。しかしこの説にも弱点がないわけではない。それはすなわち、Deferrari がいみじくも言っているように、俗ラテン語からスペイン語にかけてつねに存在した、語頭を強め語内を弱める傾向があるにも拘らず、ここではそれとは正反対の変化 ([j]>[ʒ]……強め) が起こっている点である。筆者は Deferrari はここにこそ彼の「勢い理論」を適用すべきだと考える。つまりこれは Alarcos も言っていることであるが、LY, K'L から派生した /ʎ/ が [ʒ] になるべく、後から押した要因があったはずである。それが LL から派生した /ʎ/ である。筆者が思うに、[ʎ] 音が後から押された場合には、たとえ変化結果が [ʒ] という、より強い音であってもかまわないのではなかろうか。ましてや [ʎ] の場合、プロヴァンス語、イタリア語、カタルーニャ語、ポルトガル語には厳存しているとはいえ、フランス語ではすでに消えてしまい、いままたスペイン語からも消え去ろうとしている。これにはこの硬口蓋・側面音が一般に音声学的に言って不安定であって、とかく [j] か [ʒ] に変わる傾向を本来有していることが影響していると思う。

### 33. スペイン語 379, p. 349.

俗ラテン語 *direktu*, 古典ラテン語 *directum* > 現代スペイン語 *defetšo derecho*.

上のような KT から č(=tš) への変化の途中に Deferrari は次のような中間段階を想定している。

kt > k²t > çt > jt > tj > tš

k² は口蓋化した、つまり前寄りになった無声軟口蓋破裂音を意味している。いまこれを A 説としよう。この A 説を支持している人には他に、Menéndez Pidal, 1962 (p. 143) がある。

他方、B 説というものもある。これは、

kt > xt > çt > jt > tj > tš

という変化過程を想定するもので、Bustos, 1960 (pp. 128-131), Lapesa, 1981 (p. 79, n. 14), Resnick, 1981 (pp. 40-41) で主張されている。筆者は ç を想定する方が ç を想定するよりも自然のように思えるので、A 説を支持したいが、確信がなくてのことではない。

### 34. 結論

34.1. 言語は、一般的性質など語りえないと言っていいくらい複雑なものである。一言語についてですらそうであるから、ましてやロマンス諸語ともなると、その複雑さは例えようもなくなる。ある一般則を見つけたと大喜びしても、そのとたんに例外も見つかってしまう。本書は教科書なのだから大目に見なければならぬが、それにしても大学入試センター試験の問題のような *oversimplification* を随所に行なっている。ロマンス語学は深くやればやるほど難しいのである。

34.2. 本稿だけをとってみても、最小努力の法則、すなわちエネルギー節減の法則だけを強調している節が、4. と 9. の 2 箇所あった。これに対して、最小努力の法則とは正反対の明瞭性・最大効果をも考慮に入れている節は、

1., 20. (p. 79 と p. 80 と p. 91 の 3 箇所) の計 4 箇所もあった。前者と後者とでは明らかに相矛盾している。しかしこれをごく好意的に捉えるならば、筆者は後者の、相対立する説明を二つ用意しておく態度の方に賛意を表す。明瞭性は言語構造の整然性と捉えられなくもないからである。いずれにせよ、エネルギー節減の法則一点張りでは音声化の説明は不可能である。構造的要因や歴史・社会的要因も加えるべきである。

34.3. Deferrari は音変化の年代の推定に関しては大変大胆である。この大胆な態度といい、音変化をすべて最小努力の法則で説明せんとする態度といい、ヤンキー気質というか、フロンティア精神というか、何かそういうものを筆者は感じる。彼はアメリカ版ドン・キホーテだと言ってもいいだろう。要するに、八方破れで、欠点だらけなのだが、不思議に憎めないのである。

34.4. おもしろいのは、Deferrari が音素あるいは音素論嫌いであることだ。たしかに音変化を考察する際に、音素論的なアプローチだと、音声の実質の細目を見失う恐れがある。しかし反面では、ある一瞬間に音素的变化が起こったと仮定しないと、音変化は達成されるのに最低100年はかかるのであるから、大局的な把握に不便である。思うに、Deferrari は、アメリカ構造主義言語学のシンボルとも言うことのできる音素論は共時的にしか通用しないと誤解していたのではなかろうか。ところが実は 1928 年ハーグで開催された国際言語学会において、ブラグ学派に属す Jakobson, Trubetzkoy, Karcevsky の 3 人によって通時音韻論という学問分野が初めて提案されていたのである。

34.5 フランス語、イタリア語がこれこれだから、スペイン語も同じだろうという言い方は大変危険である。それぞれの言語の独自性を認めることに寛大でなければならない。

#### 参考書目

- Alarcos, Emilio. 1965. *Fonología española*<sup>4</sup>. Madrid: Gredos.
- Alonso, Dámaso. 1962. *La fragmentación fonética peninsular*. Madrid: C. S. I. C.
- Bustos, Eugenio de. 1960. *Estudios sobre asimilación y disimilación en el ibero románico*. Madrid: C. S. I. C.
- Catalán, Diego. 1962. *Dialectología y estructuralismo diacrónico*. *Miscelánea homenaje a André Martinet*. 3. 69-80.
- Deferrari, Harry A. 1954. *The phonology of Italian, Spanish, and French*. Washington, D. C.: Edwards Brothers, Inc.
- Galmés de Fuentes, Álvaro. 1962. *Las sibilantes en la Romania*. Madrid: Gredos.
- 原 誠. 1968. イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化(上)「ロマンス語研究」3. 21-32&43.
- 原 誠. 1970. イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化(下)「東京外国語大学論集」20. 1-10.
- 原 誠. 1980. 中南米のスペイン語(その9)——スペイン語の均一化と方言分化「東京外国語大学論集」30. 19-40.
- 原 誠. 1982. 意味について(上)「東京外国語大学論集」32. 49-69.
- 原 誠. 1985. 日本人学生スペイン語発音を指導する際の技術的問題点. *AVEC Annual Report* 1. 23-37.
- 原 誠. 1987 a. スペイン語通時音韻論の二大問題(上)「東京外国語大学論集」37. 1-25.
- 原 誠. 1987 b. 中南米のスペイン語(その13)——スペイン語における緊張性音と弛緩性音との対立の相対性について. 「イスペニカ」31. 1-16.
- 原 誠. 1988. スペイン語通時音韻論の二大問題(下)——通時音韻論の限界と展望——「東京外国語大学論集」38. 35-58.
- Hara, Makoto. 1988. *Una consideración fonológica diacrónica sobre la palatalización en castellano de algunos grupos consonánticos latinos*. *Actas del I Congreso Internacional de Historia de la Lengua*

Española. 1. 121-126.

原 誠. 1989. スペイン語通時音韻論の二大問題(下)——通時音韻論の展望——「東京外国語大学論集」39. 73-106.

Lapesa, Rafael. 1981. Historia de la lengua española<sup>9</sup>. Madrid: Gredos.

Martinet, André. 1955. Economie des changements phonétiques. Berne: Francke.

Menéndez Pidal, Ramón. 1956. Orígenes del español<sup>4</sup>. Madrid: Espasa-Calpe.

Menéndez Pidal, Ramón. 1962. Manual de gramática histórica española<sup>11</sup>. Madrid: Espasa-Calpe.

Resnick, Melvyn C. 1981. Introducción a la historia de la lengua española. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

清水実佳. 1988. スペイン語における語頭の F->h->φ の変化について. 「東京外国語大学1987学年度卒業論文」.

Zamora Vicente, Alonso. 1970. Dialectología española<sup>2</sup>. Madrid: Gredos.